おおさか KEYわーど 第17回

いまも生きる市民の郷土愛
森鴎外、幸田露伴が審査した文化財級の《市歌》

大阪市歌

1. 高津の宮の昔より
代々（よよ）の栄（さかえ）を重ね来て
民のかまどに立つ煙
賑いまさる大阪市
賑いまさる大阪市

2. 難波（なにわ）の春の朝朗（あさぼらけ）
生気　巷（ちまた）にみなぎりて
物みな動く産業（なりわい）の
力ぞ強き大阪市
力ぞ強き大阪市

3. 東洋一の商工地
咲くや木（こ）の花　魁（さきが）けて
四方（よも）にかおりを送るべき
務（つとめ）ぞ重き大阪市
務ぞ重き大阪市

元大阪読売新聞社会部長で、独立して黒田ジャーナルを主宰した反骨のジャーナリスト黒田清さんは、天満生まれの根っからの大阪人だったが、「数ある大阪の歌の中で、特に好きな一節はと聞かれれば」として、BOROの《大阪で生まれた女》の「大阪は今日も活気にあふれ」と、《大阪市歌》の「生気衢（ちまた）に漲（みなぎ）りて」をあげている（黒田清『そやけど大阪』東方出版、1994）。

明治前期、府知事が大阪市長を兼務していたが、明治31年（1898）に市会議員によって初代市長が選挙で選ばれ、庁舎も府と別々になった。大正10年（1921）には、中之島に新庁舎を建設し、これを機に公募で《大阪市歌》を制定した。歌詞は全国から2,398編の応募があり、森鴎外、幸田露伴といった錚々たる審査員の審査を経て、香川県三豊中学校長の堀沢周安の詞が入選する。 作曲は《早春賦》の作者として知られる東京音楽学校の中田章で、《ちいさい秋みつけた》《夏の思い出》で知られる中田喜直の実父でもある。まさに文化財級の《市歌》である。

黒田さんが《市歌》を愛したのは、「生気衢に漲りて」という箇所に、《大阪で生まれた女》と同じくいつまでも大阪が生気、活気にあふれた都市であってほしいという愛情がこもっているためだが、もともと《大阪市歌》は市職員だけではなく、市民が力を合わせてよい街をつくろうという意識を高める歌なのである。「咲くやこの花さきがけて、よもに香りを送るべき、務ぞ重き　大阪市」など、市民であることの責任感をも喚起しており、ある年齢以上の大阪出身者には、郷土を誇る讃歌であるとともに、市民として背筋の伸びる昂揚感ある歌であった。昭和40年代、私も母校である大阪市立道仁小学校（現在の南小学校）の音楽朝礼で習い、歌詞を取り違えたりはするが、いまでも《市歌》を歌うことができる。

印象的な体験がある。大阪市史編纂所の『大阪の歴史』第62号（平成15年）が「道頓堀特集」を組み、関係者を集めて「道頓堀座談会－その歴史と未来のまちづくり－」が企画された。私も出席したが、道頓堀の通りの東側は高津宮への参道にも思える云々と話が盛り上がったとき、“なにわ学”の泰斗、元関西大学教授の肥田晧三先生が立ち上がり、「高津の宮の昔より…」ではじまる《市歌》を歌い出されたのである。すると他の老舗の店主らも、小学生時代に戻ったかのように嬉々と斉唱しだした。さしもの私も、市民の心にかつて《市歌》がいかに深く根付いていたかを実感することとなった。

もうひとつ紹介しておくと、エキスポ70成功の余勢をかりて芦原義重以下、政財界の錚々たるメンバーの後援で、“大阪のガーシュイン”とも呼ばれる服部良一が《大阪カンタータ》を作曲する。全4楽章、50分近い合唱付き管弦楽曲で、作詞は喜志邦三と阪田寛夫、昭和49年（1974）に朝比奈隆の指揮、大阪フィルハーモーニーの演奏で初演された。ベートーベンの《歓喜の歌》を思わすラストの盛り上がりに児童合唱で《大阪市歌》のメロディーが登場する。学校で《市歌》を教えない今日とは違い、初演時の聴衆には鮮烈に響いただろう。心のなかで一緒に歌った聴衆も多かったのでなかったか。

《大阪市歌》は朝の市庁舎の始業時に流れ、市のホームページでも大阪市音楽団の演奏で聴くことができる。YouTubeでは、大阪市音楽団第100回定期演奏会で平松市長が指揮した映像や音楽ソフト「初音ミク」で作成されたものも視聴できる。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科（兼任）。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。